
孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

天馬 龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

【Nコード】

N2184W

【作者名】

天馬 龍星

【あらすじ】

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

第0話 完全無欠自己中オタク登場（前書き）

はじめまして、天馬龍星です。

何かごちゃごちゃしてきたので、最初から書きなおすことにしました。

より面白く、読みやすいものを書きたいと思っていますので、最後までお付き合いくださると嬉しいです。

第0話 完全無欠自己中オタク登場

「この子の名前は、翼^{つばき}にしようと思います、意味は可能性。この子には自由に生きてほしいんです？ あなたはそれですか」

「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな」

「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」

「わかったよ、どうせ止めても無駄ならろう。なら、好きにすればいいさ」

「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは未来のことは誰にも話さないでください」

「わかった、誰にも言わない。大丈夫、俺とお前の子供だ！ どんな過酷な未来が待っているように決して負けないさ、乗り越えて行けるはずだ」

またこの夢か？ 最近よく見るようになった不思議な夢。

校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。

椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いていると

「昨日の魔法少女シリアみたか？」

「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」

黒髪のひよろい男が、眼鏡をかけたオタクぽい男性に声をかける。オタクぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答える。

二人とも紺のブレザーを着たこの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。

「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」

「ああ、あの風で髪が靡く所がチャーミングだよな。あのネコみたいに甘い声も萌えちゃうよ」

「なかなか、お前わかってるじゃないか？ ミニスカ、黒ニーソが

また痺れるんだよな」

「そうそう、あの絶対領域は堪らんな。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」

「その気持ちわかるぜ。やっぱお前とは話が合いそうだな」

彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。

ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。

また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺の名前は天海翼^{てんかいつばさ}、魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されるほどの完全無欠自己中オタクなのだ。

幼女好き変態などと罵倒されるわ。女子には人気がなく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイと言われる始末だ。

二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまった。

後ろから二人の間に割り込み感じで思い切り叫んでしまった。

「貧乳って最高だよな、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」

「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」

いらだった顔つきのひよろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。

「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータ
イーーーー」

無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらし壁にぶつかり倒れ

たのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。

「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」

この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。

「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」

「人聞きの悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」

（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そうな薬を作るわけがない。俺は騙されぞ）

マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えて栄えている場所に住みながらの萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を——沈黙の空気を打ち破るように誰かが叫び出した。

「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焰かりゅうほむら。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」

二〇一二年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大でじんだい、日本の国民、いや、全世界において疲弊しきっていた。

しかし科学者達は解決策も講じることができなかつたのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め、法律として認められ、全日本国民適応されて、全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。

科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。

信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶもので

ある。

日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。

「よくもやりやがったな。貴様こそ俺を殺し気が、変な薬をうちやがって」

薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵^{たんか}をきる。

「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁にもそろそろ終わらせたいと思つてたんだよ」

「ヤ、ヤバイぞ！ 奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬよ。俺は逃げるからな、お前らも早く逃げたほうがいいぞ」

そう叫びながら、腹を抱えてひょろい男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焔に殴りかかろうとしたら、担任の樋口^{ひぐち}が割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行つたのだろう、全く余計なことをしやがって。

「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおつて、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に来い。その腐った性根を叩き直してやる」

「待つてください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」

「親友とケンカするわけじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」

「おい、待つて話しはまだ終わつてないぞ」

樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさん生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているの、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができた。

（どうやら、俺はコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話しかけても無視されるし、さっきみたいにくまなく会話の中に入ること

ができない。だから話し相手はいつも焰だけになってしまふ。本当はみんなと仲良く話さないのに)

第0話 完全無欠自己中オタク登場（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。
どうですか？

ちゃんと改善されていますか？

面白くなっていますか？

読みやすかったですか？

誤字脱字は気になりましたか？

全体的におかしな場所はありませんでした。

もし何か感じるモノがあつたら感想を書いてくれると嬉しいです。

一言でもかまいませんから——何かありましたら——気が
ねなく書いてくださいね。

ではこれで失礼します。

最後までお付き合いくださりありがとうございます。

第0・5話 堕ち神

教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺は、東京が萌えに侵食されていることを実感した。

二〇二八年（当時五歳）、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。

父も俺も神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。

神を信じてない人が集まり、レッドサイエンティスト教会に反旗を起こした。

理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。

暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。

そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。

しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかげで、彼らが百分と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。

さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。

「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！ 早く来い」

廊下にまで響く焰の声が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、

唐突に話し掛けてきたので振り向いた。

「ちよつと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」

「お前が俺に相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」

「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」

「確かにそれは人前で言える話じゃないな？ そんな重要なことを何故、俺に話した。しかも教会って？ 統一宗教ことか」

「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。」

あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」

この世界には人の数だけ神が存在している。九十年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。

今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させている。

俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。

また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。

人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というものの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあったが、教会は全面的に否定している。

なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与している

ことは認めていない。

焰の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。

もし助ける方法があるなら、俺も協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焰の気持ちにはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。

「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」

「はあ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」

子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。

「わかった」

「わかったならとつと教えろ」

焰はとても険しい顔をで注射器を向けつつ、全身から教えなかったら殺す的なアレを出して脅おどしてくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。

「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかというのを神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」

「一体どういうことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？　ちゃんと質問に答えろ」

注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかいついてきたからだ。

「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。堕ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会

の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができた」

「その話が本当なら、イヴが堕ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」

「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」

「魔法術師ね。まだ、そんなことを考えていたのか？ まあお前らしいか、でも俺は魔法術みたいなオカルト系は信じない。堕ち神の原因は科学的に調べるさ。」

でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。

教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」

どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとかっこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。

第1話 焰との賭け、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査。

「お前こそ、いつまで科学にこだわるきだよ。今は神を信仰する時代だぜ。お前も変わらないじゃないか、俺は科学よりも魔法術を信じているだよ」

「そうかもしれないな。俺は科学一筋でお前は魔法術の道を究めればいい。もう同じ道は歩けないのだから――」

「俺とお前じゃ、目指すものが全然違うからな。道を違え、今は敵同士だが、いつか分かり合える、友達になれると思っ^たている」

「そんなことはありえない、もっと現実を見ろよ。昔とは違うんだよ。萌えオタは大嫌いだ、俺は俺のことしか信じない。もう裏切られるはたくさんんだ」

「まさか、黙って引越しちゃったことを怒っているのか、なら誤解だ。お前を裏切ったわけじゃない。仕方ないことだったんだ、信じてくれ」

「信じる、何を信じるというのだ。何も知らないくせに調子のいいことばかり、お前を見えていると虫唾が走る。俺がどれだけ苦労して特待生なったかも知らないのに、偉そうにほざいてんじゃねえ」

「まあ俺達は、学校だけの関係で、立ち入った話しはしたことがないからな」

「学校以外の時間は全部研究に費やしている、馴れ合いは嫌いなんだ。それにオタ活動な^つてキモイことはやらない、萌えオタなんてみんな死んでしまえばいいだ」

「だから教会の誘いを受けるつもりなのか？ 萌えオタを全滅させるために」

「ああ、そうだよ。俺は萌えオタが大嫌いなんだよ、見てるだけで吐き気がしてくる」

「お前のオタ嫌いは異常だ！ 俺が居ないあいだ何がお前を変えたんだ、焰」

「てめえ、なぜオタをやっている。オタクがそんなに偉いか？ 俺に指図できるほど」

「俺はただお前が心配なだけなんだ。幼い頃に命を救われたからな」
「俺の心配をする前に、自分の心配をしろよ。教会の大学に進学するんだて、でもてめえの学力じゃ、逆立ちしても無理だぜ。学年最下位のクズが」

「やってみなきゃわからないじゃないか？ 俺の夢はやっぱりあの少女と再会すること。それを叶えるためには、大学での勉強は必須なんだよ、わかるか」

「すまん、全然理解できない。なんで名前も知らない少女のためにそこまでできる。」

しかも、てめを裏切って捨てた女なんだろう。なぜ捜すんだ、復讐するためか」

「お前には一生わからないさ、彼女の気持ちなど。紙は助けてではなく、さようならと書かれていた。つまり自分から姿を消したんだ、俺を巻き込まないために、そう彼女は優しい子なんだよ。そんな彼女の側にいたいから俺は捜すんだよ」

「まさか……本気で言っているのか？ 恋をしたというのか？ 名も知らない少女に。理解不能な感情だ」

「だから言っただろう、お前には一生理解できないことだと。このマッドサイエンティストが」

「俺はいいだよ。マッドサイエンティストと呼ばれても、何かカッコいいじゃん。でもお前は違うだろう。夢ばかり見て現実と夢の区別もつかなくなった。救いようのないバカだろう」

「ちゃんと、現実と夢の区別くらいつけられる」

「てめえが出会ったという魔法術師も、どうせ妄想の産物だろう。現実を見ていない証拠だよ」

「あの子は確かに居たんだ、俺はすっかり覚えている。アレは、夢でも幻でも妄想でも無い。現実のできごとなんだ」

「だったそれを証明して見せろ、口だけなら何とでも言える。俺の

前にその魔法術師を連れて来い。まあ、所詮無理な話だ、諦めて自分の愚かさを認める。ふっははは」

「笑うんじゃない。あの子と再会するため俺は大学に行く決めたんだ」

コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないだ。信仰心によって生み出された神は、人の心を喰らい願いを叶える異質な存在。願いを叶えることに人形になっていき、最後にはイヴに隷属する。そして焰の両親は願ってしまった。死んだ我が子を生き返らせて欲しいと、その代償に心を失った。焰は未熟児だったらしく、生まれて十日ほどで死んでしまった。だからどんな代償を払っても生き返らせたいという思いがあつたのかもしれない。

神の力は平等ではない、高位の神がいれば、低位の神もいる。

高位の神を宿した人間だったならば結果が変わっていたのかもしれない。

そんな理不尽な理由で納得ができるわけがなく、俺達は教会を憎むようになったのかもしれない。

今は寮で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。

だからコイツは神を信じない、けれど学年一位を常にキープしているから凄い。

トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。

いくら技術が発達して生活が楽になろうと宗教は無くならないのだから――

「そこまで言い張るなら俺と賭けをしないか？俺が勝ったら、助手になってもらう。てめえは馬鹿だが、手先は器用だし機械に強いからそこそ役立立つ」

「ああ、いいだろう。俺が勝ったら魔法術の研究協力と大学への手まわしを頼みたい」

「ふっ！いいぜ。勝負内容はアキバで行なわれているという萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査だ。期限は新学期までだ」

「それって今ネットで話題の魔法バトルネタか？ アキバでアニメのコスプレした、美少女達が世界の命運をかけて戦っているというアレか？ 確か魔法少女シリアちゃんのコスプレをした参加者もいるという。超々俺好みのネタじゃないか？ その真偽を確かめてくれればいいんだな」

「ああ、調査方法はお前に任せる。だが忘れるな、俺に下手な小細工は通用しないぞ。ふっははは」

コイツは何も変わっていない、兎相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺が困っている時は助けてくれたし、今だって将来のことを真剣に考えてくれている。

たぶん……萌え萌え美少女だらけのコスプレバトル調査というもの、俺を諦めさせるためのものなんだろう？ 情報元不明の怪しいものだ。調査には一週間も掛からないだろう。それ目で真相を確かめ、魔法術などはないということを証明したいのだろう。ほんと愚直な奴だ。

第2話 幼い頃の少女との出会いは初恋の味

なぜ俺がそこまで魔法術を妄信しているかという？ それを語るには、幼い頃の不思議な体験を話さなければならぬ。

あれは伯父さんに引き取られることになり、焰と別れて三年が過ぎた冬。ぜんそくを患っていた俺は学校にも行かず、家で過ごすことが多かった。それを見兼ねた伯父さんは俺にこう言った。

「そんな軟弱な身体をしているから病気に負けるんだ。よし、わしが稽古をつけてやる」

無茶苦茶である、そんな家に居たら死ぬと思い逃げだしてきた。行く場所もなく、帰ることもできなくて、近くにあった公園のブランコに座り無駄に時間を過ごしていると、どこからともなく綺麗な歌声が聞こえてきた。とても澄んだ歌声で思わず聞きいつてしまふ。心震える歌声に興味を持ち、声の主を捜してみることにした。そして伝説のイヴと見間違うほど瓜二つな少女と出会ったのだ。たぶん初恋だったのかもしれない。言語眼げんごがんを用いてイヴの伝説を調べることにした。

言語眼とは音声が文字なって見えるうえに、どんな言語も読めるし、語源も理解することができる。

つまり、知らない、文字、単語、文法がないということだ。

一度読んだ書籍を記録・検索・再生することができる。

書物を読むことにだけ長けた力であり、他に何の使い道もない力である。

欠点は全て日本語になってしまったことと、数式など文法で表すのが難しいものは解析できないということ。つまり、式を解く能力は持っていない。

父から受け継いだこの能力を使えるのは俺と義妹の虹彩アイリスだけだ。

利点は、力の発動が簡単でリスクがないこと。発動時に目が光ることも紋章が浮かべあがることもない。黒い目のまま発動できるた

め、他人に勘づかれることはない。

そして驚愕の事実を知った、この世界とは別にもう一つ世界があること。次元の壁というものを超えた先に、魔法少女達が暮らす夢の世界がある。その世界ことをアルネシアと呼んでいる。

『貴方様を幾年も捜していました。桜さまから預かったこれを渡すために』

言語眼によって写しだされた文字を読めるだけで、会話をすることはできない。見るだけの能力だからな。

一冊の本を差し出してくる。表紙に何も書かれていない白い本だ。桜というの母の名前だったはずだ。この少女は母の知り合いなのか？ 母のことはよく知らない、顔だて写真でしか見たことないし、父も死んだ母のことを全然話してくれなかった。いつも他人を信じるな、教会の神を信じるな、教会は敵だ。自分以外は敵だと思えと言っていたのに、教会の仕事を受けて死んだ。

『これは始まりの書。言語眼を持つあなたなら読み解く事ができるはずです』

押しつけてくる本を軽い気持ちで受け取り、本を開くと文字が光出し直接頭の中に入ってくる。頭が痛い、割れそうだと思い閉じると頭痛も治まった。

『どうやらまだ早過ぎたようですね。もう少し時が経てばきっと読み解けるようになるはずです。だって貴方様は言語眼の持ち主なのですから』

真っ直ぐな赤な瞳が心をざわつかせる。内に秘めた何かが彼女と共鳴しているようで身体が熱い、だが嫌な熱さじゃない。

少女の身体的特徴を簡潔に述べると、澄みきった日の白い雲なみたい髪で、ふわふわと柔らかかそうに靡いていた。一点の曇りも無い白磁の肌が人形だしさを強めていた。その肌よりさらに白いワンピースに白いスニーカ、そして黒い日傘を差していた。ワンピースはとても質素なもので彼女には不釣り合いだと思った。雪の精霊を思わせるくらいの神々しさがあつたから――

例え、会話できなくても、仲良くなるのには、さほど時間はかからなかった。

言葉を交わさないでもわかりあえてる気がした。

なぜ、そんな気がしたのか？ 傍で笑っていてくれたから、ずっと一緒に居てくれたから、いつもいつも、公園にいた。約束もしていないに毎日毎日俺が来るのを待っていてくれた、それがとても嬉しかった。彼女は俺の深いところまで入り込んで来ていた。学校にも家にも居場所のない俺は、彼女と居るときだけが、安らげた。彼女も同じ気持ちだと思っていた。でも、そんなのは俺の勘違いだった。

事件が起こったのは、彼女と出会って二週間の後のもとても寒い日だった。運悪く伯父さんに捕まってしまい、しごかれてしまった。

伯父さんのモーションアイは、反則的な強さがあり、まず勝ち目はない。だって動きがすべて見切られるんだよ、これだから武闘派は嫌いなんだ。まだ身体中が痛むし、今日は寒いな！ 吐く息が白くなり、雪もばらついている。手袋にマフラー、使い捨てカイロと防寒装備でいつも公園に向かった。彼女に会うためだ、公園に到着した時にはうすらと雪が積っていた。雪の中で見る彼女はとても幻想的で、輝いていた。この世界に舞い降りた天使のようで、息をするのも忘れて見てしまうほど彼女は美しかった。

俺が来たことに気付き、ゆくりと歩いてくる。左胸辺りに手をあて、呪文のようなものを唱えると少女はうつむきながら

『貴方様の父親である一心様に堕ち神の調査をお願いしたのは私なの』

「キミは教会の人間なのか？」

しかし彼女は何も答えないまま、俺の前から姿を消した。言葉が通じていたのかも定かではない。ただ彼女はもうここに来ない気がした。

次の日。公園に来て見たが、やはり彼女の姿は無く、一枚の紙切れだけが残されていた。

スベリ台に貼られた紙には、汚い字で「さようなら」と書いてあった。

名前も知らない少女を捜す手段も無く、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

彼女は一体何者だったのか？ 本当に教会の関係者なのだろうか、わからない多過ぎた。

ただ一つだけ分かっていることわ。

彼女は魔法術師だったということだ。

彼女はぜんそくを治してくれた、彼女と別れてから一度も発作が起きていない。

しかし異性と付き合えない身体になってしまったのも事実である。だからこの呪いを解くために魔法術のことを調べ始めた。

そして、まだ始まりの書を読むことはできない。もし読む解くことができたならこの呪いを解く方法がわかったかもしれない。それに始まりの書は、イヴに所縁ゆかりのあるものだから、彼女に会う方法もわかったかもしれない。

だから俺は魔法術の勉強を始めたのだ。彼女の言葉を信じて、早く始まりの書が読めるようになるために。

第3話 兵器少女との出会い

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

十二月二十四日、恋人もない俺は、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査のために、今秋葉原にきています。

でも折角来たので、友達を誘ってエロゲー買ってから調査をすることになりました。

「じゃあな、つばさ」

「おお！ またな」

かみなか しりやま

神中と白山と別れた俺の両手には、エロゲーショップで買った、大量のエロゲーが入った紙袋がある。もちろん本日発売したものだ。二人とも、とあるオフ会で知り合った二次元信者で、とても気の合う友達です。

シャボン玉みたいな薄い膜に守られた少女が突然姿を現した。

その現実離れた光景を見て、俺は確信した。アキバで何かが起こっているのは間違いない。興奮気味に身体を震わせ、思わずエロゲーの入った袋を落してしまう。気にせず数メートルに倒れている少女を凝視する。

「魔法少女シリアちゃんに似ているな。まるでアニメの世界から出てきたようだ」

自分を落ちつけるように、小さく小さく呟いた。

（しかしなぜ、全裸なんだ。噂ではコスプレした少女達が戦っているはずだ。どういった経緯で空から萌えキャラが降ってくるという状況になったのかはわからない）

あちこち怪我をしている、そうとう激しいバトルだったのだろう。コイツを襲った犯人がまだ近くににいるかもしれないと思い経ち、辺りを見渡すが、人影はなく物音すらしない。薄気味悪い静けさに恐怖を感じずにはいられなかった。

気が付いた時には、人気のない公園に迷い込でいった。

確か白いワンピースに、黒い日傘を持った、小学生くらいの子を追いつけていたはずだ。どこか雰囲気がい出の少女に似ていたから、思わず後を付けてしまったが、結局見失ってしまった、尾行に気付かれたのかもしれない。変質者だと思われたのだろう。探偵や刑事に向いていたいな。

——よく考えたら、可笑しな話だ。あれからもう十年近くも経っているのに、姿が変わってなかった。まるで歳をとってないように見えた、そんなことありえないのに。

彼女を見失った場所に白い羽が何枚か落ちていた、これは天使の羽などではないのか？ そんなメルヘンチック考えながら歩いていたら、声が聞こえた。若い女性の澄んだ声だ。

辺りを見渡すが人影は無い、後ろの方から聞こえたように気がするに——誰も居ない。

『貴方の助けを必要としている者がいます。資格を持つ者よ、始まりの書を開き呪文を唱えなさい』

エロゲーの入った袋を一旦地面に置き、リュックから始まりの書を取り出し読み始める。

『永久とこしえに眠りし英知の結晶。私の呼びかけに答え、その姿を現せ』その呪文に反応するように黄金色に輝き出す始まりの書。

どからともなく無色透明な膜に包まれた少女が現れ、始まりの書をリュックに戻し、エロゲーを拾い追い掛けたら、人気のない公園に迷い込んだというわけだ。

見れば見るほどシリアちゃんに似ているな、一分の一等身大フィギアみたいでお持ち帰りしたい気分になるぜ。

数メートル先に倒れている、シリアちゃんに瓜二つな女性は一休

何者のか、非常に気になる。溢れだす好奇心を抑えることができず、何だか少しワクワクしてきた。

非現実的に足を踏み入れたと思う――ライトノベルの主人公の気持ちに少しわかった気がした。

それと同時に危険な匂いがプンプンする、上手い話には毒ある。

これは罠ではないのかという気持ちが芽生えはじめていた。

裏があるはずだ、どう考えても可笑しいだろう。

関わったら大変なことになるぞ。

それでもいいのか俺、自問自答を繰り返す。

（ここで逃げたらヘタレだ。美少女を目の前して逃げるなど愚か者がすることだ）

何より胸が高鳴りを押さえることができなかった。

高校生活は、思っていたよりも普通で平凡で退屈なものだった。

家に帰ってマンガ・ラノベを読み、ゲームをやり、また学校に行く、その繰り返しだ。

高校生になって変わったことは何一つ変わっていなかった。

バイトを始めたわけでもないし、彼女ができたわけでもない。

もうすぐ卒業するというのに中学生の頃と何にも変わってない。成長していないだ。

それはなぜか。

勇気がなかったからだ。

―― 一歩踏み出す勇気が――

だから、このフラグを逃すわけにはいかないという気持ちで一杯になった。

しかし、現状何をすればいいのかわからない。

とりあえず、救急車を呼ぶべきだろうか？

それとも人工呼吸……それ以前にまずは、呼吸をしているのかを確認するべきなのか？

こういう時にどうすればいいのか？ いまいちわからない。

とりあえず少女に近寄り、片膝をつき、呼吸を確認する。

どうやら息はしてるし、目立って大きな怪我は無い。

（わかっていたことだが、近間で見るとやはり萌えキャラだ。空を切り取ったような青い髪に、閉じた目を覆う長い睫毛。顔のパーツはどれを取っても俺の理想とするもので、完璧といってもいい。まるで俺の頭の中を覗いて、それを具現化したそんな少女だ）

まあ、そんなことはありえないだけね、頭の中を覗くとか。

しかしこのまま放置するわけにはいけないので、呼びかけてみることにした。

「おお、大丈夫ですか？ 生きてますか？ 何があったんですか」
反応はなかった。困ったな、どうするかなど、思索している時

「ここはどこ？ あなたは誰」

少女の声が聞こえ、思わず振り向いてしまった。

ビシューーー

不覚にも、勢いよく鼻血が出てしまい、彼女にもかかってしまった、少し申し訳ない気持ちになる。

いかんいかん、まさか三次元相手にこんな約束な展開があるとは、油断した。

相手も凄く驚いている、しかし悲鳴をあげる様子はない。固まっているのか？

（いきなり知らない人が目の前にいって、鼻血をかけられ、普通驚くよな）

俺の心臓もバクバクで、あたふたとしてる。もう拳動不審で完全な変質者だ。

このままではまずいと思い経ちとりあえず血を拭こうとした。

彼女の白く滑らかな体を血で汚してしまったから、そう決断し、彼女の身体を直視する。艶めかしい、それでいて素朴な感じもあり、実体がまるで掴めないミステリアスな女性で直視したまま動けなくなる。

身体にこびりついた血を、指で拭って軽く舐めった、その妖艶で萌えるしぐさにドキとした。そして妖艶な笑みを浮かべて少女は

「この血は、お前のか？ 感謝する」

（傷が治った！ 一体何者なんだ、この少女は）

腰まで伸ばした、艶やかな光を醸し出すスカイブルーの髪で胸を隠していると言っても、貧乳だけだね。とても残念な胸で、くせ毛のない整った清純派に髪に、日焼けのない滑らかなので、生クリームのように白く柔らかそうな肌、全身から醸し出される甘い香りに魅了され、心奪われる。

大きく丸みを帯びたエメラルド・グリーンの瞳はネコみたいで可愛く、断然ネコ派の俺には好印象で、鼻と口は小さく、まさに萌えキャラと言った顔立ちだ。

十人中十人が萌えキャラと答えるだろう。

背は低く、百五十前後といった感じで、幼さない少女といったイメージの人形のように可愛い女の子である。

間違いなく日本人ではない、だが外人のそれとはまた違う、言葉ではうまく言い表せないが、彼女からは何か異質なモノを感じる。本能的に関わるな、危険だと訴えている、警告して来るが、動けなかった。

彼女の目には力があり、その妖艶な体に魅了され、動くことができなくなほど美しい身体は、まさに二次元美少女以上の輝きがあった。

まあ萌えキャラだけだね。

両手で胸を触り目線を下げ、彼女は自分の体を見ると少し肌が赤くさくらもちみたいになる。小さくて可愛い胸を直視する、視線を外すことができない。

（三次元はクソゲーで、三次元女に興味のないこの俺が、目を離せなかった）

「きゃあああああ」

今度は叫び声をあげた、だが心地よい叫び声だった。

どうやら自分が何も着ていないことに気が付いたらしい。

耳まで真っ赤に染め、恥ずかしくなったのか。踵を返し、逃げる

ように走り出した。

その背中に向けて、できるだけ紳士的に優しく叫ぶ

「ナイス——— 恥じらい」

親指を立て締まりのない顔になりながら心の中で呟く。

（決してロリコンではない。思わず叫んでだけで、これはたぶんお約束なんだろう）

振り返って涙目で「ま……マント……生成」と叫び胸の前で祈るように手を合わせ、手全体が光り出してから少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、体に纏わりつきマントとニーソックスを形成した。

変身した。

それはまさに魔法少女の変身シーン。

このクソゲーな世界で、夢にまで見たもの。

魔法少女の変身シーンが見れるとは、それだけ生きてて良かったと思える。

もう思い残すことはない。

イヤ違うだろう俺、ここで終わっていいのか？

いいわけがない、確かに得体の知れない、危険な少女なのかもしれない。

でも、俺は「魔法少女が大好きなんだ」と腹の底から歓喜の声を上げ、ガッツポーズをとってしまった。

（だってリアルで魔法少女を見てしまったら叫ばずにはいられないでしょう。これもお約束だよ。このチャンス逃すわけにはいかない。夢にまで見た非日常ライフが待っているんだから）

「私とした事が裸身を見られたくらい動揺してしまったが……」
逃げるのを止め、振り返り叫んだ。

しかし、その顔はまだ赤く、声も少し震えているように感じた。
それがとても可愛く抱きしめたくなつたがこらえて、俺は少女と目線を合わせるために屈んだ姿勢をとる。

「リアル魔法少女とか……マジ、俺の予想を超えてるぜ！ ついに

俺様の時代がきた——」

「いいか、繰り返し言うが、血の提供痛み入る」

あまりない胸を張り、右手を腰にをあて、左手を突き出し、勢いよく叫ぶが届かない。俺はしゃがんだまま一方的にわめき続ける。もはや会話など存在しない。

「オタクが夢を見る時代は終わらない、エロは世界を救う！ 魔法少女最高」

「人の話を聞けっ」

腕を左右に振りオーバアクションで叫ぶも、聞く耳を持たない。自分の言いたいことだけをひたすら語る、相手の話はまったく聞かないで押しつけがましく、まさに自己中と言った感じだった。

魔法少女に会えたことがあまりにもうれしくて熱くなり過ぎていた。

「よし大丈夫だ、全て任せろ——で、その下はまだ何も着けてないのか？」

（言った後に激しく後悔した。でも、だって気になるじゃないか）

ゆでダコのように頬を赤く染め、目を見開きビックリした表情が、また萌える。

もうホント可愛いな、お持ち帰りしたいくいだよ、マジで。

貧乳好きの俺としてはたまらないな、ほっそりとしたスレンダーな身体わ。

「ええい、もういい。ココはどこだ」

そのしぐさ、表情、全てが可愛くて、俺は思わず脱ぎ出していた。これが妖しの術か？ 何て恐ろしい術だ。

魔法少女を目の前にして興奮を抑えることができなかったのかもしれない。

「この変態！ 人の話を聞け。コミニケーション能力ゼロか、それとも上手く言語が翻訳されていないのか」

目線を下ろして不敵な笑みを作り、蔑むように、憐れむように見つめてくる。とりあえず服を着るか、寒いからな。自制心は大切だ

よな、やり過ぎるとひかれるからな。少し自重してちゃんと相手の話を聞か、それがいいな。これ以上怒らすのは得策じゃない。

「うん、大丈夫。ちゃんと聞こえてるよ、でキミは何者？」

「よくぞ、聞いてくれた、わたしは兵器だ」

「……………」

「——兵器」

「うむ、そうだ」

どこをどう見ても、萌えキャラである。しかも俺好みの萌えキャラだ。

「こ……っくらっ！ だからジロジロ見るのをやめろ」

耳まで赤く染めて、何とも頼りない紺色マントをしっかりと掴み胸を隠し、足を固く閉じているが——黒いニーソックスが眩しい。今の姿からは異質な物は感じない。気の所為だっただろうか？ まあ、可愛いからどうでもいいや。

「最初は堂々と見せていたじゃないか」

「それは確かにそうだが、なんか貴様に見られるのはイヤなんだよ。何かを思い出したようにいきなり辺りを見回す。

「教会からの追っ手が！ 近くにいますはずだ」

手にマントが引っかかり下半身が露になるが、本人は気がついていないみたいだ。

危機迫る感じで公園を見回しているが、人の気配は全く感じない。これだけ叫んでいるのに誰も来ない可笑しいのかもしれないが——

——美少女が突然現れる何ていう、『王道展開』にあっただせいで、驚く気にはなれない

しかしというか、やはりというか、下は何も入っていないんだ。つまりノーパンだったなどという、いやらしいことを考える余裕はあった。

「どうやら近くに敵はいないみたいだな。貴様に一つ教えておきたいことがある。この身体のことだ」

「改まってどうした」

「大人しく聴け」
「ああ」

第4話 自立型人形（アルネシアドール）

——それは戦国時代。

あまたの宗教が入り混じる日本で、唯一絶対神を追い求めた男がいた。その男の名を花守天心といって、天下統一のためには唯一絶対神が必要だと考え、神を顕現する方法を摸索している途中で異界の存在を知ってしまった憐れな男じゃあ。

異世界アルネシアに魅了された憐れな男は、一族の力を借り、始まりの少女イヴが眠るといふ遺跡で始まり書を見つける、それが非劇の始まりであった。

始まりの書を手にした男は、異世界の門を開いて異世界人を招き入れてしまった。

何かに取りつかれたように人格が豹変してアルネシア人ともに忽然^{いつぜん}と姿を消した。

それから神隠しが起こるようになり、多くの若い女性が行方不明になった。

行方不明になったの女性は、アルネシア神復活の供物として捧げられるために、選り抜かれた者達じゃあ。心に深い闇を抱え、神に助けを乞った者達の中に私も居た。

神の石と呼ばれる、アルネシア神の力を宿す宝石を身体に埋め込まれ、神の器としての教育名の調教を施された。

神の石は、寄生する個体によって形を変え、宿す力も違う。中には心を喰われ人形になったものいた。

そして百体以上の自立型人形^{アルネシアドール}生み出され、天心の追い求めた唯一絶対神の器になれるのはただ一人だけ、それ以外は廃棄処分が決まっていた。

生き残るために多くの仲間を手にかけてしまった。

残り半分になった時に反乱が起こった、その混乱に生じて施設から逃げることに成功した私はあてもなくさまよっていた。

しかし生まれた時代が良かった私の力を必要とするものはたくさんあった。兵器としての力、他者を殺す力、それを存分に使い殺し続けた。戦^{いく}が終わった頃には独りになっていた。恐れられ忌み嫌われていた私を救ってくれたのが、マスターじゃ。

マスターが私に居場所をくれたから、今の私があるのだ。マスターには感謝している

そこで話しが終わったのを確認して話し出す。

「なるほど難しいことはわからないけど、魔法少女ということではないだね」

「一体何を聞いていたんだ、貴様は——私は兵器だ。断じて魔法少女ではない。わかったか、変態野郎」

誇らしげに顔を近づくる。よほど兵器であることが嬉しいのだろう。俺には理解できない感情だ。魔法少女のほう^{ふひん}が断然素晴らしいのに、そのことに気付いていない彼女が不憫^{ふひん}に思えた。

「まあ、行き成りこんな話を聞かされたら驚くのも無理はない。どうだ、私の凄さがわかったか」

どや顔で言ってくる少女の顔を見ながらとりあえず頷き、さつきから気になっていたことを尋ねてみる。

「話にでてきた、始まりの書ってこれのことか」

「おっ！ それだ、間違いない。なぜ、貴様がそれを持っている」

「やっぱり、この本のことか？ この本の持ち主を捜しているだよ。何か知っているか」

「すまん、長き眠りについていたのでわからない。でもマスターなら知っているかもしれないけど……今どこにいるのか、わからない。はぐれてしまったのだ」

「一体何があっただんだ。なぜシャボン玉みたいな薄い膜に包まれて、全裸で現れた」

「統一戦争で核に傷を覆った私は、回復のため長き眠りについた。その隙を教会の奴等に攻撃され遅れとった私を逃がすためにマスタ

「は単身で乗り込み、シリウスの転移術でここに飛ばされたわけだ」
「治療カプセルに入っていたから全裸だったわけだ。しかしなぜ俺の前に現れたんだ」

「それはたぶん貴様が始まりの書を持っているからだろう。転移術は大きな魔力に引き寄せられるからな」

「一樣筋は通っているな。お前が何者なのかはいまいちわからんが

」

「貴様こそ、何者だ。普通の人間が始まりの書を持っているわけがない。それは神の力を宿した魔導書だ。資格を持つ者しか触れることができないはずだ」

「生憎、俺は普通の高校生だ。特別な力も持ってないし、この本だつて偶然手にいてただけだ。お前が思っているような、特別な人間ではない。残念だったな」

どうにも納得のいかなそうな顔をしているが、嘘はついていない。言語眼を持っているが、始まりの書は使いこなせてないしな。それにしてもマント一枚というのは、いろいろとまずいよな。

精神的に——よし決めた。

「ちよつと、ついてこい。貴様の服を買ってやる。その格好ではいろいろまずいだろう」

「施しは受けん。服ぐらい自分で生成できる、私をあまり愚弄するな」

「そういうなよ、貴様の力は有限なんだろう、血がなれば何も生成することができない。そうだろう」

「なぜ、それを知っている。まさか教会の人間か？ 私を追ってきたのか？」

（やつぱり、そうか？ だから俺の血を浴びて傷が治ったのか？

人間の血をエネルギー原としているわけか？）

「俺は教会の人間じゃない、お前の言動を聞いていればそれくらいわかる。いざつて時に力が使えなかったら困るだろう」

「お前が教会の関係者じゃないなら、私に血を吸わせる。そしてた
らお前を信じてやる。もちろん買物にも付き合ってやる。なか
かの好条件だと思わないか？」

「思わないね、だって痛いのはヤダもん。それに面倒事にも関わり
たくないしね。血を吸われるくらいなら逃げるね、全力で……」

「私を置いて逃げるといいのか？ こんな軟弱者が教会の人間のわ
けないか？ 恥を知れ、それでも男か」

「何とでも言えればいいさ、争いごとは嫌いなんだよ。だから、お前
がどうなるうと構わない。俺は見ず知らずの人間のために命を掛け
られるほど、おしとよしじゃないんだよ。成さなければならな
いことがあるからな」

（なんで、俺こんなこと話してだろう、まるでバカみたいだ。関わ
りたくないならとつと逃げればいいのに……）

「お前にも成さねばならないことがあるのか？ わかった、お前に
ついて行く」

「おお！ わかってくれたか、さっそく服を買いにいくぞ。ついて
来い」

「私に命令するな」

「いろいろとめんどくさいヤツだな」

「面倒言っつな」

地面に落としたエロゲーを拾い、俺達はコスプレショップを目指
して歩くことにした。できるだけ人のいない道を選んで向かった。
さすがに人通りの多いところを堂々と歩く勇氣はなかった

第5話 立派な魔法少女に育てます

なんとか、コスプレショップに来た俺達は驚愕していた。

「俺も来るのは初めてだが、ココは凄いな！ いろんな種類のコスプレがある、バニーや、ナースや、メイド、あとアニメの衣装もたくさんあるな」

「ああ、凄いとしか言えないな。こんな摩訶不思議な服を見たのは初めてだ」

「好きなものを選び、金の心配はしなくていいからな」

「本当にいいのか？ お前へ意外といい奴じゃないか」

「今頃気付いたのかよ、まあいい。早く選べよ。日が暮れちゃうから」

「ああ、そうしよう」

「よし、これに決めた。じゃあ試着して来るね、覗くなよ。覗いたら殺すからな、絶対殺すからな」

「わかったから、早く行け」

何度か振り返りながら、慎重に試着室に歩いて行く。俺はとりあえず試着室の側で待たせてもらうことにした。衣擦れの音が想像を駆り立てる、覗く気はないが、女の子の着替えを見たいという気持ちはある。それが可愛い子なら、なおさら見たいと思うものだ。男はそういう生き物だ。

しばらく葛藤が続いた。命は惜しいが、でも覗きたいという気持ちも捨てきれない。俺はどうすればいいだと、頭を抱えていると……カーテンが開いた。どうやら着替えが終わったようだ。

「どうかな？ 似合うかな？ 私、こういう服着るの初めてだから、よくわかんなくて、感想聞かせてくれる」

とてもしおらしく言う彼女は可愛らしく、ハロウィンの衣装も非常に似合っていた。まさに彼女のためにしつらえた、ピンクドレ

ス、その上に羽織る紺のマント。頭上に輝く紺色のとんがり帽子は魔女といった出で立ちを強くしていた。

魔法少女らしさの欠片もないコスチュームだ。まるで俺の好みをわかっていない。ほんとうにコイツは魔法少女としての自覚があるのか……はなはだ疑問である。

「何だ！ その格好は！ 確かに好きなのを選んでいいといったが、それはないだろう？ 魔法少女らしさがまったくない。却下だ、着替えなおせといたいところだが……それはそれで、なかなか似合ってるし、時間もないから今日のところは許してやる、ありがたく思え。ふはははは」

「いちいち、何で偉そうなんだ！ 素直に誉められないのか？ 全くめんどくさい奴だな」

苦笑を浮かべているが、どこか声は弾んでいた。会計を済ませて俺達は次の目的に向かうことにした。

もちろん下着も購入した、さすがにノーパンのままではまずいからな。あとブーツも買ってあげた、服に似合うやつね。いつまでも靴下一枚で歩かせるわけじゃないでしょう。ふびんな子だと思われるちゃうよ、ホント捕まらなくて良かった。

「なあ、どこに向かっているんだ」

「お前は黙ってついてくればいいだよ」

紺色のマントを靡かせながら、人気のない路地裏を進む少女、その斜め後ろからついていく俺。かれこれいぶん歩いている、ほっとけないオーラを出していたので、仕方なく一緒に行動している。あくまでも、仕方なくだ。俺は決して優しい人間じゃないからな、見ず知らずの他人のために行動できるほど立派な人間じゃない。ただコイツが本当に兵器なのか、気になっているだけだからな。

「ところで本当に貴様、兵器なのか？」

「その眼は、私の言う事を信じてないという眼だな」

「イヤ、貴様の言うことを信じてないわけじゃないだ、ただ現状それを確かめる術がないしな。でも決して疑っているわけではない。

信じてくれ」

「まあ、こちら辺でいいか？ 人気もないこの廃墟ならゆつくり話すこともできるか？」

そう言いながら辺りを見渡す、ここは確か法律改正の影響で捨てられた場所……昔は最先端技術を扱っていたみたいだけど、今は立ち入り禁止区になっている。

「魔法少女になる決意ができたのか？ 異世界の話を俺に聞かせてくれるんだな。どんな悪と戦っているんだ、なんだかわくわくしてきたな」

「最初に言っておく、私は魔法少女になるつもりもないし、異世界から来たわけでもない。お前の考えているような不思議な力はない。しかし倒さなければならぬ敵ならいる。頼む、私のパートナーになつてくれ、お前はなかなか見所のある男だ！ もちろんお礼はする。どうしてもアルネシア杯で優勝しなければならぬんだ」

「でも俺、普通の人間だし、戦う力なつて持つてないよ」

（確かに非現実の世界に憧れてたけど……それはエロゲーの世界でバトルモノじゃないんだよな。武闘派の家に育ったからかな？ こういう運命的な出会いでもバトルモノ展開なのか。争いごとは嫌いなにいつもこうだ）

「それは大丈夫だ、私はお前に力を与えることができる。ここで会ったのも何かの縁だ。力をしてくれ」

（何でこんな展開になっただろう、俺はただ平和な世界で魔法少女とイチヤイチャできればそれでいいのに、武術の世界は逃げられないのか？ これでは少女を助けた意味がないじゃないか？）

「私には共に戦う、パートナーが必要なんだ。頼む」

「そんなこといきなり言われても困るよ」

「血の契約を交わそうではないか」

「契約？」

「そうだ、契約だ。私と契約しアルネシア杯で優勝すれば、貴様の望みも一つだけ叶えることができるぞ」

「興味深い話ではある。だが断る、俺は他人の力は借りない主義だ」
「どうしても叶えたい願いはないのか？」

「ある、だがそれは自分の力で叶えなければ意味がないんだ。だから他者の力は借りない」

（まあ、ハーレム王国はちよつと創つてみたいけどな）

「そうか、やつぱりそうなのか。この世界に私の味方など独りもないのか？ 私は孤独だな。帰る場所すらないとは」

陰のある表情を見て俺は唇を噛みしめ、こみ上げてくる感情をぐつとこらえる。

彼女の虚ろな瞳を見ているといたたまれない気持ちになった、こらえきれない涙が溢れてくる、何とか励ましてあげたかった。彼女にはずつと笑顔でいて欲しかった。

「つまりお前は魔法少女で俺の家を仮住まいしたいと」

満面の笑顔浮かべ、歯を光らせ、ガッツポーズを取り

「という事だな！ パートナーになるのは無理だが、友達にならなくてもいいぞ」

それが精一杯だった、もつと気のきいたことが言えればいいんだけど、うまく口にできなかった。頬掻きながら相手の言葉待った。
「友達か？ 変わったことを言う奴だなお前は、私は兵器だぞ」

顔を真っ赤に染めて「それも悪くないか！」と微笑む。

見てるこつちまで恥ずかしくなり、顎に手を当てながら

「と、なると俺はマスコットか？ つまり兵器もとよい、魔法少女にエロい事しほうだいというわけか？」

子供だな。バカだからこんな時どうしたらいいのか、わからないから、ついふざけてしまう。真剣に人と向き合うことはできない。本当に弱く情けない人間なんだよ、つくづく嫌になるぜ。いつだって俺は独りよがりだ。相手の気持ちなんて考えていない。

人とちゃんと向きあうことのできない、不完全な人間なんだよ。だからかな、彼女をほつとくことができなかつた。

「おい、貴様はどこまでふざけているつもりだんだ。それなら私が

どんなに恐ろしい兵器を見せてやる」

「何をする気だ」

全身の筋肉を張りつめて身構える俺。彼女から目が離せない一体どんなものを生成するつもりだ。ゴクンと息を呑む。けれど何もおこらなかつた。

可哀想な目で彼女を見る。ここまで緊張感を出しといて、それはないだろうと思つたからだ。この空気に絶えかねたのか、身振り手振りで説明を始める。その姿は滑稽でしかかつたため、思わず笑つてしまふ。そんな姿を見て必死に叫ぶ少女。

「ち……ちがう！ これはちがうぞ。私は本当に恐ろしい兵器なんだ」

「わ・わかつた、わかつたから、泣きそうになるな」

「これはエネルギーが足りなくて武器を生成できないだけで……」

「燃費の悪い奴だな、やつぱり服を買つといて正解だったわ」

「また私を愚弄するつもりか。なら許さんぞ。お前から血を根こそぎ奪つてやる」

「ほお、やる気か。俺は強いぞ、小さい頃から鍛えられてたらな」

手をポキポキと鳴らしながら、にやりと薄笑いを浮かべる。

「やれやれ、どうやら少しお仕置きが必要なようだな、ここなら人目もないし丁度いい」

「ずいぶんと自信満満だな、逃げるじゃなかつたのか？ この臆病者め」

「あの不思議な力が使えないということがわかつたからな、今の貴様など恐れるに足らん」

「あまり私を舐めるな」

爪を立てて猫みたいに飛んでくる

（先手必勝ということか？ やられる前にやる。良い根性だ）

「とにかく血をよこせ」

「こら、抱きつくな」

（あれ何ともない？ この子は本当に人間じゃないのか）

異性に抱きつかれると、全身から猛毒を出し、相手を殺すという呪いがかかっている。

これは健康な身体を入れた、対価みたいなもので、名も知らない少女からもらった力だ。

まあこれが原因で、普段女には興味ない振りをしているだけなんだけね。

しがみついていた少女を引きはがし、暴れる少女をなだめるように優しく語りかける。

「やれやれ、いくら昨今では美少女バトルが多いとは言え、安易に主人公に襲いかかるのは感心せんな。それでも魔法少女か？ 愛と正義のために戦え、そしたら俺も力を貸してやる。血はあげないけどな」

「いいか、私は魔法少女なんかじゃない兵器だ！ だから愛と正義のためには戦わない、自分の信念のために力を振るう」

（魔法少女じゃ無い、どうやらホントみたいだ……呪いが効かなかったしな。人間じゃない何て……あんまりだ）

その場に倒れこみ、涙を流しながらコンクリートを叩く。冷たくて堅い、でも俺には心地よいくらいだ。

「そんなに落ち込まなくても……」

「だから最初から言っているだろうが！ この身は兵器、戦に勝つ為の武器だ」と

「ぐすん、そりやそうかもしんだけどさ。まあ、そんな都合良く魔法少女が現れたりしないよな」

「自分で言うのもなんだけど、兵器が見の前に現れた事にはやっぱり驚かないだな」

「ああ、驚かない。だってお前は魔法少女だろう。その根拠は魔法少女シリアに似ていることだ。なぜ似ているのか、答えてくれ。それがずっと気になっていたんだよ」

「貴様の言っていることはさっぱりわからない。魔法少女シリアとはなんだ。アルネシア人のことか？ 異世界アルネシアには多くの

魔法少女が住んでいるからな。しかし私はアルネシア人ではなく兵器だ」

「そうか、わからないか。では貴様に用はない。イヤ、さてよ？

コイツが神秘的な力を持っているわけだし」

（変身もできるし、コイツといればそのマスターというのにも会えるかもしれない。独りで闇雲に探すよりも効率がいい）

「おい……ちょっと、どうしたんだ。急に黙りやがって、何を企んでいる」

「てっ事は……俺がお前を立派な魔法少女なるように教育すればいいのか。それ全て解決か。よし決めた。俺がお前の面倒をみてやる。行くところないんだろっ」

「ちよつと待って……勝手に話が進んでいるぞ」

第6話 漆黒の魔女カサンドラ

「やっと見つめた……永遠とも思える時間を生きて——」
機械的などても冷たい声が聞こえた、いつの間に現れたのだろうか。

目の前に、黒いミニドレス着た少女が立っている。

俺と背丈の変らない、でもどこか大人びた雰囲気がある女性。

少女は自称兵器を静かに見つめ佇んでいる。

その姿は、深淵の闇、深い夜、そして絶望的な黒を思わせた。

肩の上で切り揃えられた髪も、ひじまで覆う手袋もみんな漆黒で、手に握る剣……それも黒刃の剣だ。

剣先だけが赤い漆黒の両刃の剣は、艶めかしく光り、切れ味の恐ろしさを物語る。

左手で剣を軽く持ち上げた途端、黒刃に細かな赤の装飾文様が浮かび上がったと同時に、長い前髪の下の黒い瞳が、かすかに光を放つ。

「久遠の魔導具を渡せ」

（何を言ってるんだ。この女は？）

「カサンドラ、お前も生きていたのか？ イヤ、永き悪夢から、目覚めたのか」

「ひさしぶりね、最後にあったのは一世紀くらい前だったかしらね。ホント懐かしいわ」

「もうそんなに経つのかしら、時が経つは早いものね、カサンドラ」

「一体何を話しているだ、貴様たちは知りあいなのか？」

「ええ、彼女とは古い付き合いよ、人間。大人しく渡してくれるなら、危害は加えないわ」

「ふざけるな！ そんなことできるわけないだろう。コイツは俺様の所有物だ」

「どうやら死にたいようだね、キミは」

不敵な笑みを浮かべ地面を強く蹴り、一気に距離を詰めてくるカラサンドラ。

俺が身をひるがえすより早く首目がけて斬りかかる。

食らう寸前しゃがんで避けたが、すぐさま第二撃目を後方に転がって避けるが、頬をかすつていたみたいだ。血がパタパタ垂れた。

「どうやら武道の心得があるみたいね。でもただの人間じゃ、私は倒せないわよ」

「ここは一旦逃げるぞ。コイツは危険だ」

「何処に逃げるといふの？ この時の止まった世界で。私の能力で時を止めているのよ、だからどんなに叫んでも助けも来ないわ」

「おい、奴の言っていることは本当か」

「ええ、本当よ。私の能力は創造で、カサンドの能力は時の凍結」

「でもそれ可笑しくないか？ 奴が本当に時を止められるなら俺の時間も止めれば、それで済むだろう」

「そうね、たぶん彼女もまだパートナーを見つけてないからだと思う」

「確かに私はまだパートナーを見つけてないわ、でもそれだけじゃないの？ あなたから、強大な魔力を感じるわ。初めは彼女と契約したのかと思っただけで違ふみたい出し、でも普通の人間にこれほどの魔力はないはずだわ、あなた一体何者なの」

「普通の人間だよ。両親も普通だしね」

（嘘である。両親のことはよく知らない。でも本当のことを答える義理もない）

「まあ、そんなことどうでもいいわ、どうせすぐに死ぬんだから」

「奴は本気であなたを殺す気よ、早く逃げて」

「逃げろって言われてもな。折角手に入れた、魔法少女をミスミス手放すわけにはいかないよな。やっぱ俺も戦うよ」

（こんな危機的状况でも、彼女を見捨てて逃げるといふ選択肢はなかった。もちろん危機感はあったが引くに引けない状況だった。俺は臆病な人間だから、誰かを見捨てて逃げるなんて、勇気ものもな

いんだよ)

「あんた本当に馬鹿ね。まあ、そういう馬鹿は嫌いじゃないけど」

「どうやら死ぬ覚悟はできたみたいですね。せめてもの情けです。苦しまないように、一瞬で終わらせてあげますわ」

アレは一撃必殺の居合いの構え。迂闊うかつに近づくのは危険だな。ここは遠距離からの攻撃にきりかえるか

「おい、飛び道具か、何か持ってないか」

「ごめん、持ってない」

「そうか、ならしうがないか？」

遠距離攻撃は無理だ。拳一つで何とかするしかない。覚悟を決め、地面を強く蹴り、カサンドラ目掛けて殴りかかる。

「ぐっは」

致命傷は避けたが、やはり斬られた。血がドバドバでてくる。何て切れ味のいい剣だ、かなりの業物とみた。右脇腹がキリキリ痛む。

「おい、かなり血が出てるぞ大丈夫か」

叫びながら少女が掛けっ寄って来る。

「これくらい大したことない」

「そんな傷まで覆って、よく笑ってられるわね」

「魔法少女の前では笑顔でいるって決めているんだよ。その方がお前も安心するだろう。それに魔法少女は宝だからな、必ず守ってやるよ」

(でも、痛いのは嫌いらし、血を見るのだて好きじゃない。できれば争いことならはしたくない。でも幼い頃の自分との誓いは守らないとな)

「だから、私は魔法少女じゃないと言ってるだろうが、何度言えばわかるんだ。ボケが」

「安心しろ、ちゃんと立派な魔法少女教育してやるからな。大丈夫、大した傷じゃないさ」

「いまから応急処置から、あまり動かないで」

泣きそうな顔で必死に包帯を巻いてくれている少女を見て、ああ、ありがたいと思いながら、話し始める。

「魔法少女ってさ、愛と正義のために何の見返りも無く、その身を犠牲にして戦っているんだよ。それって誰でも真似できることじゃないよね。自分のために戦うじゃなくて、大切な誰かを護るために戦う。それが魔法少女なんだよ。でも兵器はどうだい、人を殺すために道具、それでは誰も護れないじゃないか？ キミを孤独にするだけじゃないのか。それじゃあ、あまりにも悲し過ぎるじゃないか。救いを求めるなら魔法少女になって、俺と戦わないか？ キミなら立派な魔法少女になれると思うだ」

話し終えた頃には応急処置は終わっていた。

自称兵器は俺の血を使い、壁を作り、敵の攻撃を防いでくれただけでなく、傷の手当までしてくれた。何ていい奴なんだ、見ず知らずの俺を助けてくれる何て。クソ、泣けるぜ。

「貴様という奴は、魔法少女のことしか頭にないのか？ つくづく理解不能な男だな」

「命を懸けるには十分過ぎる理由だ。俺は世界の誰よりも魔法少女を愛しているからな」

「相当の変わり者だな。だが残念なことには私は兵器だ。人殺しの道具だ、いまさら生き方は変えられないし、魔法少女になるつもりなどこれぼっちもないさ。だからお前はここに隠れている。私が捕まれば済むことだ」

「ふざけるな！ 何勝手に諦めてんだよ。成さなければならぬことがあるのだから。なら最後まで諦めるな。希望を捨てずに戦え、そして自分の意志を貫け」

「貴様に言われるまでもない。私は私のためにしか力を使わないと決めたのだから。貴様の力など借りずとも大丈夫だ。日本最強の兵器だからな」

壁に亀裂が走る、もう悠長に話している時間はないのかもしれない。

「最後、これでは言わせてくれ、死ぬな」

「当たり前だ。もしもの時はコレを使え」

決意の言葉と同時にぐらいに風船のような物を俺に渡してきた。

「コレは何だい」

「一度だけお前の命を守ってくれる。使い方はふくらますだけだ。うまく使え」

クソ！ 一人で行きやがった、かつこつけやがって、やつぱり正義の為に戦ってんじゃないか？ それでこそ魔法少女だ、俺もこんなところでじつとなんてしてられない。何か作戦を考えないと殺されてしまう。

第7話 血の契約

壁が碎ける音ともに少女の悲鳴が聞こえた、俺は駆け出していた。無我夢中で走り出しだ、少女の安否を確かめるために、辺りをくまなく探す。

そして瓦礫に埋もれている彼女を発見した。

「今、どかしてやるから待っている」

なんとか、瓦礫をどけ彼女を助けだすことに成功した。

「おい！ 大丈夫か？ 血まみれだぞ」

「なぜ、出てきた。死にたいのか？ バカモンが」

「そんな、傷だけかけ身体で他人の心配をするとは、貴様もずいぶん変わった奴だな」

「私達は似ているのかもしれない。強がりで、意地っ張り、そのくせ、本当は弱い」

「ああ、そうかもしれない。だからほっとけないのかもしれない」

「仲良く話しているところ悪いんだけど、これで終わりにしてあげるわ。光を奪え、エクリプス」

少女のことで頭が一杯になり、敵が近づいてきていることにまったく気付かなかった。

辺りが真っ暗になる、世界から光が消えたみたいだ。何も見えな
い。

闇に紛れて無数の斬撃を繰り出してくる。アイツの悲鳴も聞こえ
た。

（バカなこの暗闇中で俺達の姿が見えているというのか）

音無なく迫ってくる刃、避けることは不可能に近い。完全に闇に
溶け込んでいる、実戦経験をかなり積んだ、プロの暗殺者だ！

しかも斬れるたびに強い脱力感ある、まるで力を吸われているみ
たいだ、長期戦は不利だ。となると、とれる行動は一つしかない。
アイツの力に賭けるしかないのか。

「臆病者め、姿を隠しネチネチ相手を痛ぶることしかできないのか？ この弱虫」

「弱虫ですって、許せませんわ。この最強の一撃をもって葬ってあげるわ」

「俺の急所はここだ！ ちゃんと狙えよ」

「その減らず口も聴き飽きましたわ」

鈍い音が響き、光が世界に戻ってきた。やったな、特に作戦プランとかはなかったが、俺達は似たもの同士だ。奴等ならきつとやってくれると信じていたさ。これで俺達にも勝機が生まれた。

「一体何が起こったというのだ。なぜ光が戻った」

「地面を見てみる」

「地面が光っている。これはヒカリゴケか」

「それは普通のヒカリゴケ比較にならない明るさを放つ。どうやら半径三メートルまでしか暗闇にできないようだな」

（鈍い音の正体はゴムだった。ゴム風船で作った人形を身代わりにすることで一命を取り留めた。そのあとは賭けだったが、成功して良かった）

「小賢しいことをしてくれますね。でももう虫の息のみたいですわね。大人しく久遠の魔導具を渡せば、命だけは助けてあげますわ」

「てめえはバカなのか、俺が魔法少女を手放すわけねえだろう。それにな俺はこんなところじゃ死なない。死ぬわけには行かないだよ」

とりあえずアイツと合流しよう、そして二人でコイツを倒そう。

一人で出来なくても二人なら倒せるはずだ。どうやらアイツも同じことを考えていたみたいだ！ 何か叫びながらこっちに近づいてくる、声がだんだん大きくなる。俺も走り出す、彼女に向かって全力で駆け出す。しかしその道をふさぐカサンドラ。

「そこをどけ、邪魔だ！ 俺達の道をふさぐな」

「なら、打ち破ってみてくださいな。お前たちの底力を私に見せてくれ、そして私をもっと楽しませてくださいな」

「私はここで壊されるわけにはいかない、これが最後のチャンスよ！ 私と協力してカサンドラを倒しましょう」

「それしかないか？ 俺もまだ死にたくない、あの少女に会ってないからな。いいぜ、協力してやるよ」

カランドラをはさみうちし、俺はありったけの力を込めた掌底を腹めがけてくりだす。同時攻撃だ、これはさすがに避けられないと思ったのもつかの間、身体を掴まれ、一回転し地面に叩きつけられ、その後俺の右腕を掴んで彼女のほうに投げられる。なんて俊敏で力強い動きだ、まったく見えなかったぞ。

「おい、変な所触るな、どけ！ くつつくな、変態」

覆いかぶさるように倒れた、俺は少女に罵倒された。すぐにどうとしたが、変な倒れ方をしたしせいかな？ 絡まって身動きとれないという不可解な状態に陥った。甘い香りが鼻腔をくすぐり、とても幸せな気分になる。彼女の吐息やら体温を肌で感じる事ができるくらい、かなり密着した体勢である。この死んでもいいなと思えるほど心地良かった。

「コラ、息をかけるな、気持ち悪い。お前、今の状況わかってないだろう、だからそんなにふざけてられるんだよ。コラ、動くな。変なところに当たるから、この変態」

「仲良くじゃれあっているところ悪いんですが、そろそろトドメを刺さしてあげるわ、二人一緒に仲良く死んじやいなさい」

「時間がない、早く私の血を飲め、死にたいのか」

「ああ、わかったぜ」

少女の首筋に噛み付く、血はとても苦く、錆臭いくてお世辞にも美味しいとは言えない。

だが、死にたくなかった、だから無我夢中で血を吸った、血に飢えた、吸血鬼のように激しく吸った。

身体中が光出す、あまりの眩しさにカサンドラも近づけないようだ！ よし、ほどけた、身体を自由に動かさせるぞ、それに細胞の一つ一つが活性化しているのがわかる。傷がみるみる治っていく、全

身から力が湧いてくる。これが血の力か？ 過ぎすぎる、一体どうなっているんだ。

「契約は成功したみたいね、力が溢れてくるがわかるわ。まるで生まれ変わったみたい」

「これが血の契約か？ 今なら何でもできる。不可能なことも可能にできるはずだ」

（こんなことならもつと早く契約しとけば、そしたらこんな痛いめにあわないで済んだのかもしれない。でもピンチからの大逆転の方がカッコいいか？）

「そうでなければ……面白くないわ、さあ、お前たちの全てを私にみせて。全力でお相手してあげるから、楽しいパーティの始まりよ」
「貴様の戯言にいつまでも付き合うつもりはない。エロゲーを剣に変える力で一気にかたづけてやる」

（えっと、今日買ったエロゲーはどこだろう—— あ・あった）

運よく近くに一つ落ちていた、エロゲーまでの距離約十センチ。

素早く地面を蹴り取りにいかうとするが、邪魔が入る。

（クソ、後もう少しなのに？ 手がエロゲーに届かない）

「自分の能力を喋るとは、救いようのないバカですね」

「それは貴様のほうだ、カサンドラ」

「どういうことですか？」

アモノムラクモノツルギ

「天叢雲剣生成」と叫び、手が光り出して少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、剣を構成していく。

それは両刃の大剣で、刀身は紫で、柄は黒。

大きさは少女の背丈以上あるが、片手で軽々持ち上げている。

ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「そういうことですか？ それで勝ったつもりですか？ 爪が甘いですわね、スイーツのように考えですわ」

大剣を斜めに力強く振り下ろすが、軽く受け流される。

「残念でしたわね。このエクリプスはオレイカルコス製ですよ。そんなナマクラでは、傷一つつきませんことよ」

この際にエロゲーを掴み、武器に変えることに集中した。
ジャンルによって武器の形状が決まり、武器の効果を変える。

俺が手にしているのは陵辱系、効果は服従。

形状は短剣。

刃渡り五センチぐらいの短剣。

材質はヒヒロカネ。

エロゲーが短剣へと変えていく。

両刃で細身の刀身は闇夜の中でも煌々と輝く緋炎。

それが自分の身に宿した力。

短剣を正眼で構えて地面を蹴ってカサンドラと間を詰め、素早く
頬を切り裂くことで効果が発動する。

「油断したな」

カサンドラの動きが止まる、これが俺の力だ。

「何をしたのですか、身体が動がまったく動きません。これはどう
いうことですか」

「今だ、トドメをさせ」

相手の動きを数分しか止めることしかできない。これも俺がこの
力を完全に把握していないからだ。もって一、二分だろう、だから
彼女にトドメをさしてもらったことしたのだ。

「いちいち私に指図するんじゃないわよ、それくらいわかってい
るわ」

「や、止める——」

構う事なく斜めに思い切り振りおろす、カサンドラの身体はか
ら血が噴き出し、地面を赤く染める。

「やった」

「イヤ、逃げられたわ。手傷を負わせることはできたけど」

「えっ！ どうやって逃げたんだ」

「それは簡単よ。あなたの想像以上に彼女の力は強力で、あなたの
力は未熟だということだけのこと」

「俺の力は、ものの数秒しか効かなかったということか」

「そういうことね、この未熟ものめ。あと契約について伝えておかなければならないことがいくつかある」

「簡潔に説明してくれ」

「お前の身体に私の血が馴染むまでおよそ三日。七十二時間ね。それが過ぎたら二十四時間以内に私の血を飲まないと貴様は死ぬことになる」

「それはどういうことだ」

「契約の対価だ、驚くほどのモノではないだろう。あと私の血を飲むことで繋ぎりが強くなる。もはや私達は一心同体なのよ。記憶の共有に感覚の共有。貴様が傷付けば、私も傷付く、もはや貴方と私は離れられない。どこにいても繋がっているのよ。」

それが血の契約……私とパートナーを組むということ、そして力を得るということ。

契約を終わらせるには、私の願いを叶える……それしか方法は無い。

貴様に選択の余地などもはやない。

さあ、私ともに生きましょう。

世界が終わるまで、ずっと、ずっと一緒にいましょう」

（ふざけるな……俺は、まだやることがあるだ）

などなどと思ったがとりあえず、短剣をエロゲーに戻し、散らばっているエロゲー紙袋に戻し、大急ぎで逃げようとしたが遅かった。巡回お巡りさんに捕まってしまった。罪名 幼女誘拐および強制わいせつ。もちろん無罪を唱えた。だが誰も信じてくれなかった。

みんな口をそろえて『あいつならやると思ってたよとか、イカレタ野郎だからとか』、他にもこんなことを言っている奴もいた。

『ローリコンだからな、絶対やると思ってたよ』みんな好き勝手いってくれる。

第8話 組織

飾りつけもなくだった白だけの部屋。

そこにぽつんと、鳥カゴがある。

鳥カゴと言っても人間が一人丸ごと入れる大きさだ。

その中で一人の少女が泣いている。

目は赤くはれ、喉もかれている。もう永い時間泣いているみたいだ。

少女の背中には翼があつた、白く綺麗な翼だ。

もしかしたら、少女は天使なのかもしれない。

決して比喻ではない、それくらい美しかった。

少女はある男の子を思い出していた。

とても優しい人のことを――

見ず知らずの言葉も通じない私のことを気にかけてくれた――とても優しい人である。

名前も知らないけど、その顔はわすれない。

もう会う事ができなくても。

鳥カゴの鳥は決して外にでることはできないから。

アレは淡い夢でうたかた。

でも決して忘れることはできない大切な思い出。

あの子は私のことを覚えているだろうか？

もし覚えていてくれたら嬉しいな。

ああ、会いたよ。会いたよ。

地面が涙で濡れていた、何で俺は泣いているんだ。何か夢を見ていた気がするがよく思い出せないが、始まりの書は黄金に色に輝いてた。俺の手元に残ったのは始まりの書だけである。他は全て取り上げられた。なぜ始まりの書だけ残ったてそれは秘密さ。拘置所で迎える朝はとても寒い。そして俺の身に何が起きたのかを思い出し、

愕然とする。

俺捕まっただけ。そんな嘆き悲しんでいる時に、怪しげな神父が面会にやって来た。

もちろん知り合いではない。無神論者だ、教会なつて一度もいったことないし、教会関係者に知り合いはいない。

「お礼を言いに来たんだよ。スピルを助けてくれてありがとう」

感謝の言葉を述べているのに表情一つ変わらない、のっぺり顔の男。服装は紺色のスーツに首から十字架を下げている。髪は綺麗に整っており、ほんとうに特徴らしい特徴のない男だ。

「なんのことを言っているのか？ 俺にはわかりません」

「キミが捕まる前に助けた少女のことですよ。我はその子の保護者みたいなものです」

「お礼は言葉より、俺の無実を証明してくれた方が嬉しいです」

「もちろん、そのつもりできました。ただし一つ条件があります。何、簡単なことです」

何も書かれていない白い仮面を張り付けたような顔で言われると、物凄く怖い。

「俺にできることなら何でもします」

「娘の恩人ということとでいろいろと調べさせてもらいました。特殊な環境で育ったようですね。しかも始まりの書を所有しているとか？ 実に面白い話ですね」

「神父さまは一体何者なんですか。なぜ俺のことをそこまで知っているんですか？」

「娘の恩人でも、それはお答えすることはできませんね。ただ貴様の敵ではありません」

「それで俺は何をすればいいんですか？」

「娘を助けて欲しいんですよ、あなたは娘と契約したんでしょ」

「まあ、成り行きでしたけれど、後悔はありません。魔法少女との契約は王道ですからね。もちろん助けるつもりですよ」

「ありがとうございます、断られたとうしようかなと思ってました。

あなたを証明するものは、全て消去しましたから」

「消去？ それはアレか？ 捨てられたということか」

「少し違いますね、存在した痕跡を消したのです。簡単に言うと『過去改変』ですね、はい、だから捨てられたではなく、忘れられたです、世界に」

「そんなことが本当にできるのか？」

「出来ますとも、それが組織の力です。そして今日からあなたも組織の一員です」

「ちよつと待つてください、スピカとか言ったか、あの子は守る。だけど組織に入るとは言つてません」

「それは困りましたね、あたなの存在は全て消してしまいましたしね。組織に入ってもらわないと私の立場がないんですよ。考え直してくださいませんか」

「それはできない」

「死ぬということですね」

「なぜ俺が死ぬ、貴様が俺を殺すのか」

「お忘れですか？ あなたは娘の血を飲まないと死ぬですよ」

「ああ、そのことか？ 血が身体に馴染むまであと二日、確かにあまり時間はないな」

「どうします？ ここで死ぬにますか？ まあ一樣娘の恩字ですから、丁重に埋葬してあげますよ。だから安心して、死んでください」

「少し考えさせてくれ。すぐには答えを出せない」

「仕様が無いんですね。では明日また来ます。それまでに考えてくださいね。あなたに残された時間は……もうわずかですから、いい返事を期待してますね」

「わかりました」

「では、これで失礼します」

「いろいろとありがとうございます、ではまた明日」

そして神父と別れて拘置所に戻った。

神父の話を断つても地獄、乗ってみても地獄だろう。

どっちを選んでも地獄だな。

なら、神父の話に乗ってみるのも悪くないのかもしれない。

あの子にもう一度会いたいしな。

何て言っても魔法少女だしな、守ると誓ったからな。

まあ、ここに行っても死だけだしな。

しかし、存在消えたと言われてもいまいち、ピントこないな。

まあ、迷う余地なんてないけどね？

こんな俺を必要としている人がいるんだから。

その人の役に立つことができるだけで幸せなはずだ。

よし、明日ちゃんと答えよう。

今日はもう寝よう、いろいろと考えたら疲れちゃった。

「おはようございます。決心はつきましたか？」

「組織とやらに入ってやる、だから早くここから出せ」

「わかってくれました、ありがとうございます。娘をよろしく願います。あとこれはスピ力を助けてくれた謝礼です。どうぞお納め下さい」

小麦色の封筒を押しつけてくる。中には十万ほど入っていた。

「こんなにもらえせんよ」

高校生の自分が貰うには少し大き過ぎる金額だった。

「受け取ってください、ほんの気持ちですから。それに生きていくために金は必要です」

「わかりました。大切にに使わせていただきます」

牢屋を出た俺は、神父の紹介でとある教会に厄介になることになった。

そこは教会というよりも神殿と言った雰囲気建物だった。

巨大で立派な石組みの教会。

デザインはたぶん、イギリスとかにある大神殿だろう？

まあ写真でしかみたことのない建物だ。

石畳の教会を見るのはこれが初めてで目を丸くした。

扉を開けた先は礼拝堂になっていた。

石組みの壁にタイルの床、豪華なステンドグラス、列をなす長椅子に立派な内陣、十字架にかけられた救世主の像……どれも、西欧の歴史ある教会を思わせた。

教会という場所に来るのは、初めてだったが、思わず息を呑んだ。異世界に迷い込んだと錯覚するほど、中は広く美しかった、それに空気もたいへん澄んでいて清々しい気持ちになった。

「申し訳ございません。ここは関係者以外立ちり禁止になっております」

紺の修道服を着た、二十代後半と思しき女性が声をかけていた。とても落ち着いた雰囲気をつつた、修道服の非常に似合う女性。

「俺はシリウス神父の紹介できたものです」

金の瞳を瞬かせ、納得したよう顔で手を叩き。

「ああ、あなたが……はい、話は聞いています。スピカさんの恩人で、確か天海翼さんですよ」

「はい、そうです」

「わたしは、シスターカレナといいます。立ち話も何でしょう、食堂まで案内します」

四十五度の綺麗なお辞儀に、爽やかな笑顔。差し出された手には白い手袋がしてあった。その手を握りしめ俺は軽く頷いた。手袋越しとはいえ、女性と手を繋ぐのは恥ずかしいものだ、少し頬を赤く染めていた。

「こちらが食堂です。何か吞まれますか？ 紅茶とコーヒー、それとウーロン茶がありますが、どれになさいますか？」

「では、コーヒーを」

「ブラックでよろしいですか？」

「ミルク一つと、砂糖なしでお願いします」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

綺麗に腰を三十度に折り、あざやかな笑みを浮かべ、コーヒーを入れに向かった。

残された俺は辺りを見渡す、天使の絵が描かれたステンドグラスに、シャンデリア。長机に置かれた口ウソク、あと宗教画も幾つか飾つてある。待つこと数分で戻ってきた。

「熱いのでお気をつけてお飲みください」

テーブルの上にそおつと置かれる二つコーヒー。ミルクがたっぷり入ったコーヒーは彼女が飲むのだろう。

「ありがとうございます」

向かいの席に着き仕事の話が始める。その場の空気がりりと変わった気がした。

「あなたにはスピカさんの護衛と、各地で起きている神狩りを調査してもらいたいです」

「それが仕事内容ですか？」

「はい、そうです。やっていただけますか」

大人の笑みを浮かべ、艶めかしい声でお願いしてくる、その姿はまさに大人の女性と言った感じだった。

（いかにも怪しい仕事だ！ 神狩りの調査か？ しかも報酬も高い。神父は死と隣り合わせの仕事だと言ってた。でも断ることはできない。断れば……事務所……か）

「はい」

肩を落とし、口を震わせ、力なく答えた。まともに彼女の顔を見ることができない。

「ありがとうございます。」

彼女の明るい声に対して、目線を反らしたまま、苦笑を浮かべて軽く頷くことしかできなかった。

第9話 再会

「では、宿舎にご案内しますので、わたしの後をしつかり連いてきてくださいね」

「わかりました」

シスターカレナの後を歩くこと数分、古びた建物が見えてきた。

「こちらの建物の一〇五号室です。あとこれが部屋のカギです、無くないようにしてくださいね」

シスターからカギをもらい、宿舎の中に入っていく。

薄暗く痛んだ廊下は、所々穴があいており、壁には不気味な染みがたくさんある。月明かりを頼りに歩いて行く。どうやらこの廊下は円形になっているらしい。五部屋で、二階に向かう階段らいきものがみあたらない。外から見た感じ五階ぐらいまでありそうなのに、不思議な建物である。

とりあえず、自分の部屋に向かうことにした。

「ここか、一〇五室は」

ゆるやかに扉を開き、中を覗く。

何もなかった、家具という家具がなかったが、思った以上に綺麗だった。白く真新しい壁に茶色っぽいフローリングで、埃一つなく悪臭もしない。広さは四畳半ぐらいだろう。今日からここで生活することになるのか？

ただお布団がないのは厳しい、せめて毛布一枚ぐらいは欲しい、凍え死んでしまう。

よし、シスターに話して毛布を借りよう、そう思い経ち、教会に向けて歩きだす。

困った！ 道に迷ってしまった。土地勘もなく、シスターの後を連いていったけなので教会までの道がわからない。

道を聞こうにも人影が見えない。完全に遭難してしまった。

（このまま、ここで野たれ死ぬのかな。どうしてこんな人里離れたところにあるんだろう）

見渡す限り木、鬱蒼と生えた木が見える。それ以外見えない。この木の所為で方向感覚が麻痺する。冷たい風と木々のざわめきが体を震わせ、魔性の森に迷い込んだ気分になる。

辺りは暗く、月明りとおぼろげな記憶を頼りに教会への道を探す。

「きゃあああ——」

女性の悲鳴みたいなものが聞こえてきて足がすくんで動けなくなる。

命の危険を強く感じた、ヤバイ！ マジでヤバイ！ この森で何かが起こっている。

（どうしよう、助けにいったほうがいいのかな）

そう思い、叫び声がした方に歩き出す。できるだけ静かに、物音をたてずに慎重に森の中を進む。

「この娘どうしますか、殺しますか。アニキ」

「イヤー、縄で縛おけ。もしもの時は、人質として使えるからな」
「わかりやした」

話し声が聞こえてきたので、こっそり木の影から覗くと、ガラの悪そうな男達に少女が捕まっていた。数にして五人。捕まっている少女は、あの自称・兵器の魔法少女だ！ 確か名前はスピカとかいったな。

服装は大日本帝国海軍航空隊のモノだ。

『零戦』の名で知られる零式艦上戦闘機は海軍の戦闘機であり、航空隊の着用するを航空衣袴と呼ばれていて、布で作られていた。スピカが纏っているのは、上下ツナギ式で黄土色をしている。

アニキと呼ばれた男は、女子高生が持つてそうな、紺のナイロン製のうさぎのマスコット付いた、可愛らしいバッグを持っていた。たぶんスピカのものだろう。

なぜにバッグだけあんなに可愛いだろうか。実におかしいというか、アイツは、うさぎが好きだったのか？ 驚きだ。

（とりあえず、助けないとまずいな）

「おい、貴様ら一体そこで何をやっている」

「見てわからないのか？ お宝を頂こうとしているんだよ」

「やはり貴様らは追い剥ぎだな、ということは悪だ。悪は許さない」

「正義の味方気どりの餓鬼が、いい気になるなよ。こっちには人質がいるんだよ」

スピカの首元にナイフを突きたて叫ぶ、仲間の一人が殴り掛かってくるが、そのパンチをカウンターで返す。まず一人。

「貴様、人質がどうなってもいいのか？」

「そいつが死のうと俺には関係ないことだ！ 俺はただ悪が許せないだけだ」

「イカレてやがる。なら望み通り殺してやる、ざまあみやがれ」

スピカの首にナイフを突き刺そうとしたその時、ありえないことにスピカの蹴りが股間を直撃し、悶絶する男。

（アホだ！ アホがここにいて、人質に反撃されるなんて、アホとしか言えない）

「大丈夫ですか？ アニキ」

「よくもアニキをやりやがったな」

続いて二人掛かりで襲ってくるが、単調な攻撃なので避けるのは容易い。

「クソ！ こうなったら全員で行くぞ」

「さすがアニキ！ もう復活ですか」

「どうやら、回復したらしい、意外とコイツ等、タフだな。」

「つかまえた」

賊の一人が俺の肩を掴み叫ぶ。

「汚い手を退ける！ カスが」

肩に触れてきた男を思いつき投げとばす。

そして残りの三人を一瞬で蹴散らすし、バックを取り返す。

「クソ、覚えてやがれ」

「待つてください、アニキ」

仲間の一人を抱えて逃げていく、アニキと呼ばれていた男。その後ろを三人の下っ端。悪役とはいっつ見ても惨めなものだ。

「大丈夫かい、すぐにほどこいてやるからな」

「ええ、また助けてもらったわね、ありがとう」

「お前意外と弱いだな、あとこれお前のだろう」

そつぽを向いてバッグを押しつける。縄はもうほどこいてある。

「血、貴様の血さえあれば、あんな奴等に遅れをとることはなかった」

バッグを受け取りながら皮肉言う。全く素直じゃないし可愛くもない。まゆ毛がよって、怒っているよにも見えるが頬は少しだけ赤い気がした。手を伸ばし立ち上がるのを手伝う。細く綺麗な手だった。

「俺の血じゃないとダメなのか？」

「一度契約を結ぶと契約者以外の血を飲むと死ぬだよ。そういう風に私達は作られている」

「じゃあ今は、俺の血しか飲めないのか？」

「まあ、そういうことになるな」

まゆ頭を上げ、頬を赤く染め気恥かしそうに言うスピカは少しだけ可愛いと思った。手や足をもじもじさせ、可愛らしく身体をくねり、髪を靡かせる、その姿は絵になっている。俺の心を震わせた。なるほど、いろいろと大変だな！　ここで何をしてんだ」

「貴様には関係ないことだ。私は人に干渉されるのが嫌いなんだ」

突然怒りをあらわにするスピカ、表情がころころ変わるヤツだ。一緒にいても飽きないタイプだな。冷静に観察する、にしても俺には関係のないことだな。別に口出しするつもりもないしな、ここは一つ謝っておこう、ついでに教会の場所も聞く事にした。

「個人的問題に首を突っ込むつもりは別れない。言いたくないならそれでいい。あとお前、教会の場所わかるか」

「先から貴様は偉そうだな！　私はお前という名前ではない。スピ

力だ。覚えとけボケナスが！ 教会の場所なら知らん」

「お前——ここに住んでるじゃないのか？　なんで知らないんだよ」

「だから私はお前じゃない。スピカだ。知らないもは、知らないんだから仕方ないだろうが。ボケがっ」

「逆ギレかよ！　どうするだよ」

「私が知るか？　ボケナス」

「クソ！　このままここで話していても、埒があかない。空から探すぞ！　スピカ」

「お前空を飛べるか？　凄いな！　私は飛べないぞ」

「俺だって——飛べるか？　貴様が俺を抱えて飛ぶんだよ」

「えっ！　どうやって」

「俺の血を吸って、空を飛べそなものを生成すればいいだろう」

「ああ、その手があったか」

「やっと気がついた。ホントバカだな」

「うるさい、さっさと血を吸わせろ」

「はいはい、わかったよ」

「なんだ、そのなげやりな返事は？　貴様は私に対する敬意が足りないぞ」

「何でもいいから、早く吸えよ」

なんでコイツはいつも首筋を狙ってくるんだろう、出会ったときもそうだったな。たぶん深い意味とかないだろうな。バカだから——

——まあいいけど、やつぱり、血を吸われるのは好きになれないな。痛いし、力が抜けていく感じがあるし、もうとにかく最悪な気分になるだよ。

「終わったか？　なら、早速生成頼むわ」

「そのくらい言われなくてもわかってるわよ！　少し黙ってなさい」

ツンケンしたい態度をとりがって、ツンデレでも目指しているのか？　今時流行んねえよ！　まあ、でも意外と可愛いな。これはこ

れでいいのかもしれない。決して嫌いではない。

「なにっ！　ぼさつと立つてのよ。できたわよ」

「翼か？　しかもハヤブサの翼。スピカ良い選択だ」

「では、いくわよ！　しっかり掴まっていないと、振り落されても
しらないからね」

「これでいいか？」

「コラ、だからって抱きつくな、変態」

「無理を言っな」

「まあ、仕方ないか？　でも変なことしたら、容赦なく落すからな。
いいな」

「何もしないよ。たぶん」

「たぶん」

「何もしません」

「わかればいい、では行くか。空の旅に」

空から辺りを見渡す。一面に広がる緑。この森はどこまで広がっ
ているのか？　気になるが、今は教会を探すのが最優先事項だ。

「えっと、教会は——あった。意外と近くにあったぞ」

「シスターカレナ。毛布一枚貸してください」

「ええ、いいわよ。あそこはとても冷えるから。暖かくしないと
けないわよね」

「ありがとうございます」

「あと必要なモノがあったら、スピカちゃんに作ってもらいなさい」

「でも、アレとても疲れるですよ」

「じゃあ給料が入ったら、家具とかそろえればいいわ」

「それまで我慢するしかないですね。ところで給料日はいつですか
？」

「依頼達成後に渡しているわ、だからね、給料日とかはないの」
「そうなんですか？　わかりました」

「では、失礼します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2184w/>

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

2011年11月1日07時56分発行